
バレンタイン・キセキ

鬼塔妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン・キセキ

【Nコード】

N1470G

【作者名】

鬼塔妃

【あらすじ】

あの日君と会えた事を私は誇りに思います。
—— ありがとう。

ブログ

もう会えないと思ってた。

もう君がいなくても生きてきけるように私頑張るよ。

だから最後のお願い。

ずっと私の事を見ててください。

君が戻ってきた時とても嬉しかった。

君はむちゃしてまでいつも私の願いをかなえてくれた。

プロローグ（後書き）

下手ですみません。でも許してください。

第一生【会いたい】

「・・・いつてきます。」

私は誰もいない家に向かっていった。

「な～お～！！明日バレンタインだよ！！誰かにあげるの？」

っと学校について最初に友達に言われた言葉がこれ。

他にいうことねえ～のかよ！！

っと思いつつ”いないよ”っと笑っておいた。

まああげる人いたとしても君には教えないよ。

「猶^な今年^おも鍊^{れん}くんにあげるの??」

つと親友^{あゆ}の阿諛^あに聞かれた。

私は”うん”と言って机に顔をふせた。

鍊は昔付き合っていた彼。

3年前にある事故で死んだ。

「猶^な一緒に帰えろっ。」

鍊の事を思い出しているととくに放課後になっていた。

「アー!!..うん。」

私は急いで鞆にもつを詰め込んだ。

「んじゃばいばい。」

阿諛と話しをしているとあっという間に家についてしまった。

「うん。ばいばい。」

って言って私達は別れた。

家に入ってすぐにベッドに倒れた。

「・・・錬・・・。」

って言って私は声を殺して泣いた。

別にこの家に人なんていないしお隣さんたちは飲み会だろうけど昔から声を殺して泣いていたから無意識にしている。

「会いたいよ・・・ねん・・・。」

最後にそう呟いて私は深い眠りについた。

”バサ”

目が覚めたのは夜の12時だった。

「何時間ねてんのよ。」

つと自分で自分につつこんで冷蔵庫からサンドイッチとサラダをとりだした。

毎日こんな小食生活してるから今では体重が平均よりも5キロやせている。

食べ終わってお風呂に入った私は部屋の電気を消して音楽をかけた。

鍊が好きだった曲。

私が好きな曲。

2人が好きな曲。

聞いているうちにまた私は泣いていた。

ただ、ただ鍊にまた会いたくて。

第二生【秘密】

次の日の朝。

目が覚めると隣には錬がいた。

「・・・夢？」

死んだはずの錬がなんで？？

疑問に思う事が多すぎて私はただ啞然としていた。

「・・・ん？・・・猶・・・はよ。」

つと目をこすって笑う錬。

「・・・なんで錬生きてんの？？」

つと聞くと錬は頭をぽりぽりかいて教えてくれた。

「実はさあ猶が泣きながら俺に会いたがつてる。だから側にいつてやりたいって思ってたらなんかきちゃった。」

つとメルヘンな事を言った。

「それ・・・本当?？」

つと聞くと苦笑いしながらうなずいた。

「まあいいじゃん。また会えたんだし。」

っといって笑った。

私は納得できなかったけど錬に会えた喜びの方が大きくて錬に抱きついた。

「・・・錬・・・冷蔵庫に中見てきて。」

っと言って錬をリビングに行かせた。

錬が下にいつてる間に着替えた。

” バタバタ ”

っど廊下を走る音が聞こえてきた。

” バン ”

「猶これ！」

つといてチヨコをもってきた。

「……まずいかもしれないけど。」

つというと錬は笑って”おいしいにきまつてんじゃん”つというてくれた。

私はがまんできなくなつて泣いてしまった。

「うめえ……って!! 猶!! 何で泣いてんだ!？」

っ泣いてる私に気づいて鍊はあせった。

「・・・鍊に会えて嬉しくて・・・。」

つと言つと鍊は私を強く抱きしめてくれた。

「俺もスツゲー嬉しい。」

つと言つた鍊はかすかに泣いていた。

「ところで学校いなくていいの?？」

つと鍊が言つたので思い出した。

「あー!!今日学校だった!!」

っと言って焦って用意していると錬が笑った。

「あいかわらずだなあ。」

っと言って錬はどこかへ行った。

5分後用意ができた私はリビングに行った。

するとうちの制服を着た錬がいた。

「なんで・・・高の制服もってんの!?!」

っと言うと錬は”きにしない”っと言って私の背中を押した。

「ちょー！！錬！！」

錬にちゃんと説明してもらおうと後ろを振り向くと錬がほっぺをつねって

”遅刻” と言ってきた。

「あー！！」

時計を見て私達は急いで家をでた。

「っおー！！猶おはよー。」

っと言ってきた阿諛は私の後ろの人物を見て目を見開いていた。

「え．．．錬．．くん？？」

つと阿諛が錬にきいた。

「おゝ阿諛かあ。」

つと言つて笑つた。

「なんで!!」

つと阿諛は私に聞いてきた。

「わかんない。」

つと言つて錬をみると

「ん???あゝ俺と猶の秘密だから。」

って言うって上手くかわした。

「・・・錬。私阿諛とちょっとトイレいつてくるね。」

って言うって阿諛をひっぱてトイレに行った。

「猶!...!どういう事!」

って阿諛は私に言ってきた。

「本当に私もわかんないの。
でもね。錬昔からちゃんと聞いた事には答えてくれたじゃん。錬の
過去も苦しい事も全部教えてっていったら教えてくれたじゃん。
今回の事何回聞いても錬は上手くかわすでしょ??何か理由がある
はずなの。」

きっと私達にいけない事なんだよ。それでもきつとそのうち教えて
くれるはずだから。

一緒に錬を信じよ。」

っ
と言
うと
阿諛
は
”
うん
”
っ
と言
って
くれ
た。

第三生【幸せ】

「今日の晩御飯何がいい?」

「と聞くと」肉!」」と言ったので帰りにお肉を買いに行った。

3年ぶりの鍊との買い物はとても楽しかった。

帰ってから練は疲れているのかソファでいつの間にか寝ていた。

その間に晩御飯を作っておいた。

メニューは
豚肉のステーキ

サラダ

ご飯

にした。

匂いで目が覚めたのか練が起きてきた。

練の行動を目で追っていたら突然キッチンにきて抱きしめられた。

「ど・・・どうしたの??」

つと聞くと何も言わずに力を強めてきた。

何分かたってから練は腕を離した。

やっと離してくれたと思う気持ちと離された寂しさがまぎって何もいえなかった。

「なんか落ち着いた。」

ニコっと可愛く笑って”飯”と言われた。

テレビを見ながらご飯を食べた。

練は爆笑しながらテレビを見ていたが私はテレビを見てるふりをして今日おこった事を振り返っていた。

正直今日の不思議な出来事を深く考えたくはなかったが練の今さっきの行動が気になって
つい考えてしまう。

「・・・猶さあゝ今日の出来事ふりかえってんだろ?？」

っと急に視界いっぱい練の顔が映ったのでびっくりした。
私は正直に頷くと練は少しさびしそうな顔をした。

「・・・今日の事明日詳しく話すから。だから今日は・・・今日は俺の事だけ考えてよ。」

っと言って私に抱きついてきた。

私は練を抱きしめて頷いた。

練と一緒にいたけどあんな寂しそうな顔を私に見せたのは初めてだ。

だからそれだけ言いたくないことなのかもしれないと思った。

その日夜遅いのにゲーセンにいこつと練に言われて外にでた。

すると外は雪が降っていた。

「わぁ・・・珍しい。」

つと空を見ているとさっきよりもいっぱい降りだした。

私は昔から雪が好きで2月に入ってから雪が降ったのは3年ぶりだった。

「猶そろそろいこ。」

つと言われて錬の方を振り返った。

そこには優しく笑っている錬がいた。

昔は当たり前に錬がそばにいてくれて悲しい時や辛い時は2人で泣いたり、面白いテレビをみたら2人で笑って手おつないで帰ったり一緒に買物したり遊んだりどこにいたるときも錬と一緒にだった。

なのに・・・あの日そんな幸せな日々が消えた。

「楽しかったあゝ!!」

っと満足した様子で錬が背伸びをして言った。

「なんで今日だったのぉ??明日でもよかったじゃん。眠いよ。」

っと言うと錬はまた少し悲しい顔をした。

「楽しくない??」

っと聞いてきた。

「ううん。すっごく楽しかった。でも……。」

「でも??」

不安そうな顔で私の顔をのぞく錬に微笑んで

「眠かった。」

っと笑って言った。

すると錬は”なんだよ” っと言って笑った。

またあの頃の幸せな日々が戻ってきたような気がしてとても嬉しかった。

帰ってから私達は一緒にねた。

「なあ・・・今日楽しかったか??」

つと急に聞かれたので錬の方を見ると錬は私を真剣なまなざしで見
ていた。

「・・・うん。すごく楽しかった。錬は??」

つと私も真剣に錬を見た。

「ああ。すつげー楽しかった。」

その日最後に”大好きだよ”つと錬に言っ
てねようとした。

その時かすかに”俺も好きだ”つと聞こえた。

第四生【手紙】

くくくくく

朝セットしてないはずの時計が鳴った。

「うん・・・錬？？」

と隣にいるはずの錬の姿を捜したがいなかった。

急に錬がいなくなった頃のような不安がよみがえってきた。

「錬！！」

リビングに言ってみたが何処にも錬の姿はなかった。

「錬！！」

すべての部屋をさがったが鍊の姿はなかった。

私は不安になってその場に座ってないていた。

もしかしたら学校かもしれない。

と思ったけどすぐに今日は休日ということを思い出した。

また部屋に戻ってベットに寝転んだ。

ツフと机をみると白いものが目に映った。
ベットから降りてその白いものを手にとった。

その白い物は手紙だった。

それは鍊から私への物だった。

私はすぐにその手紙を読んだ。

猶へ

おはよう。

急にいなくなつてごめんな。

昨日はすごく楽しかった。

チヨコもすっげーうまかった。

実はな急に何かが光つたと思つたら猶の”あいたい”って声がして
気付いたら寝てる猶の横にいた。

俺何がおこつたのかわかんなくてさ固まってた。

そしたら急に頭の中で誰かの声がして
今日だけその子と一緒にいてやりなさい。

って言ったんだ。

これマジ話だかな!!

色々考えたけど寝てるお前を見たらどうでもよくなって俺も気付いたらねてた。

猶が起きた時正直びびった。

どう説明すればいいのかわかんなくても猶にいつちゃいけない気がしてた。

猶”なんで”ってずっと思ってただろ??

あれ俺も（笑）

お前は本当にいいやつで俺が言いたくないって思ってたら深く聞かずに笑ってくれてすっげー嬉しかった。

あの日急にお前の前から消えてごめんな。

お前を見た時わかった。

ずっと俺を思っていてくれてたことも俺が突然死んでお前が泣いてた事も全部わかった。

悲しい思いさせてごめん。

だけでもう俺猶と会えない。

俺は一度死んでるから。

猶。

大丈夫だよ。

怖がらずに一歩ふみだせばいい。

俺がずっと見ててやるから。

泣きたいときは声だしてなけばいい。

俺が慰めてやるから。

んで笑う時はおもいつきり笑え！！

俺も一緒に笑ってるから。

あとあのお笑いテレビみる!!

あれは最高だったぜ!!

あゝ俺ももう一回みてえゝなあゝ。

猶。

大好きだったよ。

俺の事好きになってくれてありがとう。

会った時の俺をほっとけれないって言ってくれてありがとう。

こんな俺を選んでくれてありがとう。

本当に……ありがとう。

楽しかったよ。

ありがとう。

そんでさよなら。

鍊より

第五生【ありがとう】

私は手紙をそつと引き出しにしまった。

不思議と涙は出なかった。

悲しいっという気持ちもあったがそれよりも錬の死を受け止めれてスツキリしている自分がいた。

外に出るとまた雪が降っていた。

でも今日の雪は一粒一粒がキラキラ光っていてとてもきれいだった。

その雪はまるで錬みたいでとても安心できた。

私は空を見上げて大きく息を吸った。

いってきます。

っと言ってゆつくりと学校へ向かった。

阿諛に錬の事を伝えと”そっか”っといって深くは聞いてこなかった。

ただいつもどおりにせっしてくれた。

あの日錬が私の所へきてくれなかったらずっとあの日の事故の事をひこずって踏み出せずにいたと思う。

きつとあのチヨコも溶けていただろう。

あの手紙を残してくれなければ私はまた悲しみのどん底に落ちていたかもしれない。

きっと私は錬の事忘れない。

ううん。

忘れい。

絶対に。

すっく

すっく

錬の事

私ね

あのね

錬

大好きだよ

だから一歩踏み出してみる。

もう少し

もう少しだけ

私のこと

見守っててくれますか???

鍊

——ありがとう。

第五生「ありがとう」（後書き）

書きながら少し感動してました。死んだ人間は実際よみがえりません
がまた会いに来てくれたら嬉しいだろうなっと思って書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1470g/>

バレンタイン・キセキ

2010年10月9日22時00分発行